

●初級者でも弾ける、やさしい「マズルカ」

# レッスンの友

ピアノ音楽誌 a magazine for music lovers

# 10

2010/October

No.565



## シヨパンを弾いてみよう

初級者でも弾ける「マズルカ」から

阿部裕之・大森智子・武田美和子

東邦音楽大学  
第4回『東邦ピアノセミナー』から  
～シューマン「子供の情景」より～

### Interview

ピアノデュオドゥオール

練木繁夫  
藤波結花

LESSON FOR TOMO

ブラームスの交響曲第一番の作曲者自身による編曲の連弾版をプログラムの中心にしたリサイタルを京都（9月25日・青山音楽記念館バロックザール）と東京（10月7日・津田ホール）で行なうピアノデュオのドウオールのお二人にお話を伺った。



## ピアノデュオ *Deu'or* ドウオール

白水芳枝さん & 藤井隆史さん

オーケストラ作品をピアノで演奏しているのではなく、作曲者自編のピアノ曲として捉えていただきたい。

### オーケストラ作品を自分たちが演奏する意味を

——今回のリサイタルでは、ブラームスの交響曲第一番を連弾で演奏なさいますが、そのことからお話しください。

白水「私たちは元来、ピアノ・デュオのオリジナル曲を弾きたいという思いがすごくあります。ところが三年前に、ブラームスかベートーヴェンかチャイコフスキーかドヴォルザークのシンフォニーのピアノ・デュオをやってほしいと、あるホールの方から言われたのです。

ベートーヴェンとブラームスのシンフォニーは、全曲ピアノ・デュオ版がありますので、せっかくだったらそれを全部やりたいなと私が燃えてしまって、藤井を置いてけぼりにして（笑）、私が走り出したんです。

まず楽譜を探したんですが、全くないんです。どこを探しても見つからない。オーケストラで鳴っている音をピアノ・デュオで再現しようとは、今はなかなか思わないのでしょいか、ピアノ・デュオの楽譜は絶版になってしまったものが多いんですね。それで藤井の大学時代の先生の植田克己先生にそのことをお話ししたら、『ブラームス？ あるよ』と言って、本棚から出して貸してくださったのです。先生がまだ学生の頃に日本で

手に入れられたという、古いペータース版でした。楽譜があったというところがすごく嬉しくて、藤井を説得してやり始めたのです。

実際始めたら、私はオーケストラの音を聴くことはあっても、スコアを読み込んで、各楽器の音を深く勉強する機会があまりなかったことに気が付きました。それで、二人でブラームスの交響曲のCDを一番から四番まで何度も何度も聴いたんです。『いい曲だねえ！』って本当に思えるまで、かなり時間がかりました。そしてピアノ版を弾きながら、スコアを見て、ここは何の楽器の音だろうと勉強するのも面白かったですね。そこから曲を作っていく中で、今度はオーケストラを忘れて、一つのピアノ曲として二人で演奏したときに、どうしたらピアノ曲として聴かせられるか、ということを考えているうちに、アツという間に時間が経ってしまいました。」

藤井「連弾の場合、僕は主にセカンド担当なんです。オーケストラの楽器で言えば、比較的地味な、例えばティムパニとかコントラバスとかヴィオラとかの音が多いの



たらどう弾くんだろう、テンポのルバートの仕方だとか、強弱の付け方だとかを随分考えましたね。」

白水「例えば三楽章の冒頭で、私はメロディーを弾くんですが、彼の方には、チェロのピッツィカートが出て来ます。私はレガートですが、彼は切らなければいけない。そういう場合はどうしたらいいか。この問題一つとっても、何日経っても解決しない(笑)。こういう問題が今回ほとんど多かったですね。それもあって、三年もかかってしまいました。」

藤井「オーケストラの響きを忘れる作業をするわけです。今のチェロのピッツィカートも、チェロではなく、ピアノ曲として、ピアノで彼女のメロディーを支える、ということを考えました。シンフォニーをピアノ一台四手の音楽にするには、かなり無駄なものを削ぎ落とし、省いていかなければなりません。全部の音を再現するわけにはいきませんからね。オーケストラでは聞こえないメロディー

でも、ピアノ版に残っていたりするものがあって、このメロディーが残っているのは面白いな、と思うんです。逆にオーケストラを聴いて、何であそこは聞こえないんだ(笑)、なんて思ったりするようになりました。

オーケストラでの演奏は皆さんよくご存知でしょうから、連弾での演奏を初めて聴いたら、最初は違和感を感じる方もいらっしゃるでしょうね。そこを、少し違った視点で捉えていただきたい。オーケストラ作品をただピアノで演奏しているというのではなく、作曲家自身がピアノに編曲した『ピアノ曲』と捉えていただきたいな、と思っています。」

「牧神……」のピアノ版は、  
こんなに素晴らしい曲はない

——一曲目の『牧神の午後への前奏曲』も、ドビュッシー自身の編曲ですね。

白水「この曲は、昨年ある演奏会で連弾版を聴いて、いい曲だと思いましたので、私たちはオリジナルの二台ピアノ版でやることに

しました。この曲を聴いたら、彼がこの曲に恋してしまつて(笑)、これを弾かなければ絶対始まらない!つて(笑)。」

藤井「僕は比較的ひらめきタイプなので、ブラームスのときは、目の前に出されたものがあまりにも大き過ぎて、うじうじしていましたね(笑)。」

僕たちはデュオとして六年目になります。初めの頃は自主リサイタルが一大事業で、全人生をかけた集大成のように取り組んでいました。勿論その気持ちは今でも変わっていませんが、年間三十〜四十回のコンサートをさせていただけようになって、一回の自主リサイタルが自分たちの人生のメインというよりは、コンサートによって自分たちが成長していく過程でもある、と捉えられるようになりました。

今回のリサイタルでも、これが今の僕たちの形です、と言えるプログラムを組んだつもりです。

以前、『君たちのリサイタルは、シャーベットの欲しいんだよね』つて言われたことがあるんです。確かに、自分たちで全責任をもつ

ですが、ピアノの音の中で、そのヴィオラやクラリネットの音をどう再現していくか、ここはティムパニがよく鳴っているとところだから、タッチを変えてみたりとか、でもそうやっていると、オーケストラの演奏をそのまま模倣しているに過ぎないことになるんですね。ブラームスの時代は、オーケストラの演奏を聴くことがなかなかできなかつたからそれで良かったでしょうが、いつでもどこでも簡単にオーケストラの演奏を聴ける現代においては、それをしているのでは、僕たちが連弾で弾く意味がない、聴いてくださる方々に対しても説得力がないような気がしません。

それなら、これがピアノ曲だつ



てやるリサイタルでは、メイン・デイッシュユばかり並べたようなプログラムを組んでいましたから、重かったと思います。今回もそんなに軽いとは思いませんが……」

白水「軽くはないですね(笑)」。藤井「この『牧神……』をピアノで聴いたときに、『どうしてみんなこの曲をピアノで弾かないんだろ?』と思っただけなんです。今でも、素晴らしい曲なんです。今でも、一人で弾いていてもそう思います。気の毒なのは彼女で、第二ピアノは、あまり見せ場がないんです。僕が第一ピアノで、いいところを何から何まで一人で弾いてしまう(笑)。でもそれは、僕が彼女をもっと引き込まなければいけないんだと思います……」

同じ様にオーケストラ作品を基にしていても、ドビュッシーはブラームスよりも後に生まれて、国も違うし、二台ピアノが可能な時代になっていたのでしようが、音の扱い方が全然違うんです。ドビュッシーを別にシャーベットだと思ってるわけではありませんが、聴いたときに、今度のリサイタルでは絶対にこの曲を弾きたいと思っただけです。こんなに素晴らしい曲はないと思っています。」

白水「元がオーケストラ作品の曲を二曲弾くので、もう一曲はどうしようと思っていて、後半(ブラームス)がすごく重いので、休憩まではせめてお客さんが聴き易いもの、楽しかったと思ってもらえるような曲がいいなと……」

藤井「僕たちもちよつと大人になったでしょ?(笑)聴く人のことも考えて、自分が聴いていたら、どうか……」

白水「リストの『ヘド・ジョヴァンニ』の回想』は、今回のプログラムの中心では一番弾いている作品です。この曲は元々ピアノ・

ソロで、三十年以上経って、リスト自身が二台に編曲しているんです。この二台ピアノ版は意外と知られていないんですね。オリジナルとかなり違うところもあります。ソロ版は、『技術的にすごく難しい』とか『華麗な』とかいろいろ修飾語で表わされますが、この二台版は、難しいと言うより、楽しい、モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』のオペラ的なものを、二人がちゃんと楽しみながら提供できる音楽かな、と思っただけです。」

藤井「この曲は『回想』というのがポイントだと思うんです。ドビュッシー、ブラームスと違うのは、リストが『ドン・ジョヴァンニ』を実際に観て書いた曲、こういう感想でした、という感想文なんです。だからオペラとはストーリーの順番も違う。二台ピアノ版は三部に分かれています。が、それぞれリストがどんな風感じていたか、というのが、まるで手紙か日記のように感じられるところがあります。」

#### ピアノデュオ ドゥオール Pianoduo Deu'or (Yoshie & Takashi)

藤井隆史：東京藝術大学付属音楽高校、同大学卒業、同大学院修了。現在、東京藝術大学、及び武蔵野音楽大学各非常勤講師。

白水芳枝：兵庫県立西宮高校音楽科、東京藝術大学卒業。現在、国立音楽大学、及び共立女子大学各非常勤講師。

共にドイツ・マンハイム音楽大学大学院演奏家課程(ソロ)、ピアノデュオ科最優秀修了。文化庁、野村国際文化財団、DAAD各奨学生。各々ソリストとして数多くの国際コンクール入賞、ソロ・リサイタルやオーケストラとの共演など、ヨーロッパ、日本で活動を行なう。

2004年ピアノデュオを結成。ロンドン国際コンクール最上位、シューベルト、C.トニーニ、M.ドラノフ、「競楽VII」など国際コンクール入賞。2006年青山財団バロックザール賞受賞。

ヨーロッパ、アメリカ及び日本各地でデュオ・リサイタル、講座など活動を活発に行ない、その演奏は新聞各紙でも高く評価され、デュオ・ピアニストとしても今後の活躍が大いに期待されている。

1stアルバム「ドゥオール」がレコード芸術「特選盤」に選出。ブラームス/交響曲第1番を取めた2ndアルバム「SYMPHONIE」がリサイタルに合わせてリリースされる。

公式サイト [www.yoshie-takashi.com](http://www.yoshie-takashi.com)

僕たちは編曲作品を弾く場合、作曲者が自編したということがすごく大事なかなと考えています。リストの場合は、編曲ではなく、完全に彼のオリジナルですが、あまり知られていないので、ピアノ・デュオにこういう作品もあるんですよ、というご紹介でもあります。リサイタルを楽しみにしています。有り難うございました。



## SYMPHONIE ～壮大にして緊密な二人四手のアンサンブル～

ピアノデュオ ドゥオール（藤井隆史＆白水芳枝）

今月号インタビュー記事に登場のピアノデュオ ドゥオールによるニュー・アルバムである。今回は、オリジナル・デュオ作品ではなく、タイトルにあるとおり、ブラームスの交響曲第1番（作曲者編）を取り上げている。

ドゥオールは、2004年にドイツで結成後、国内外でピアノデュオとして200以上のステージを踏み、常に高い評価を得ている。ピアノデュオとして、これまでに数々のコンク

発売元:Studio N.A.T

NAT-09501

ールに入賞。結成直後よりヨーロッパ各地でリサイタルを開催し、アメリカではコンサート・ツアー、近年は日本各地でのリサイタル、講座、NHK他放送出演など活発な演奏活動を続けている。

ピアノデュオは、ヨーロッパでは昔から家庭などで自然に親しまれてきたジャンル。そのための作品も、様々な作曲家により数多く作曲されてきたのは自然な流れと言えよう。しかし楽しい反面、音楽的に演奏することは意外と難しいジャンルでもある。同じ楽器であっても、アンサンブルである。一緒に演奏する人の間や呼吸、フレーズ感など、実に多くの事に気を付けなければ、ただうるさいだけのものになってしまう恐れがある。そういう意味でも、子どもの頃から、連弾など他の人と合わせる（アンサンブル）機会を少しでも与えてあげるだけで、後の音楽性に非常に多くの影響をもたらしてくれる。このアルバムを聴けば、そのことがよく解る。まるでオーケストラを聴いているような、見事に息の合った名演を聴かせている。

収録曲は、ブラームス：大学祝典序曲Op.80、交響曲第1番 ハ短調Op.68。